

英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか？ — 日英ビジネス通訳の事例から —

高橋絹子(上智大学)

木村護郎クリストフ(上智大学)

Abstract

Following the previous study (Takahashi & Kimura 2017), this paper deals with how and why business people use interpreting services in international business settings in Japan. In the previous study, professional interpreters who work mostly in business were interviewed and the results were analyzed on the basis of the language management theory, which allowed to classify the business situations into distinct categories. This analysis clarified the elements that cause business people (i.e., clients) to use interpreting services rather than conducting meetings in English. In the present study, the same structured interviews were conducted with business clients who were more or less proficient in English but worked with interpreters. The interview transcripts were analyzed in the same way as the previous study. It was found that the viewpoints of interpreters and clients were slightly different. The result will help future studies to define the role of business interpreters.

1. はじめに

言うまでもなく、通訳は、異言語間コミュニケーションの重要な手段の一つである。しかし、異言語間コミュニケーションの研究における研究領域の分業を背景に¹、通訳の特徴を他の手段と体系的に比較した考察や、実際の接触場面における通訳および他手段の選択に関する調査はほとんど行われてこなかった。数少ない先行研究として、会議の場における共通語としての英語と通訳の伝達効果を比較した Reithofer (2013)、またドイツ・チェコ国境の越境的組織が通訳、どちらかの当事者言語、共通語としての英語の3つの手段をどのように選択しているかを調査した Marx & Nekula (2014) がある。

通訳という行為だけに着目してみた場合には、通訳を定義することでその特徴を述べた Roy (1993) や通訳の分類に Alexieva (1997) の研究があるが、ビジネス通訳の特徴を詳細に論じるものとしては、不十分である。また、Angelleli (2003) では通訳の存在を visible であるとしているが、ビジネス通訳に関しては、この言及が適切かどうかは、さらなる研究が必要であると思われる。依然として大きいこのすきまを埋める作業の一環として、高橋・木村(2017) (以下、「前稿」)では、ビジネスの場に焦点をあてて、「だれがいつどこで何のために通訳を使うの

か」というテーマの下に8名の通訳者に対する構造インタビューを実施した。国際的なビジネスに関しては、「英語社内公用語化」など、英語使用が注目されがちであるが²、通訳という手段もしばしば用いられている。前稿では、通訳を利用する依頼者(以下、「クライアント」)がある程度英語ができることが想定される国際的なビジネス場面において、そもそも通訳を用いるかどうか、また通訳をどのように用いるかに関して、共通語としての英語の使用と通訳の使い分けにさまざまな理由が見られることが示された。今後の課題として、さらなる使い分けの理由がみられるかどうか、またクライアントの視点からも考察する必要性があげられた。

そこで、本稿においては、継続調査として、前稿で一部しか使用しなかったインタビュー内容 (ME、ON のインタビュー) に加えて新たに4名の通訳者に実施したものと同様の構造インタビューの結果から新情報を報告するとともに、通訳者と実際に仕事をともにすることのある6名のビジネスクライアントへの構造インタビューの結果も合わせて報告し、通訳者の視点とクライアント側の視点の間で齟齬がないか、あるとしたらそれは何であるのかを考察する。このことにより、英語のできる人がなぜ通訳者を使うのかを明らかにし、現在のビジネス通訳の場面がどのような環境におかれていて、通訳者には何が期待されているのかを探る。なお本稿は、次の課題となる「ビジネス通訳の役割論」を扱う前に、その根拠となる考察を行うものであり、「役割論」は扱っていない。

前稿とほぼ同時期に刊行された Sherman & Homoláč (2017) では、チェコのベトナム移民の言語生活の調査から浮かび上がった、移民第二世代による親のための通訳を含む言語的な仲立ち (language brokering) をとりあげ、言語自体の変換よりコミュニケーションや社会文化の仲介が大きな比重を占めていることを明らかにし、今後の課題として、言語的仲介をより広いコミュニケーション・社会文化的活動との関係で考察すべきこと、また仲介者のみならず仲介活動を必要とする当事者を合わせて考察すべきことを述べている。通訳を他の手段との関連で考察するとともにクライアントにも注目する本稿は、このような指摘に応えようとするものでもある。

2. 調査の対象と方法

本研究で焦点を当てる通訳者とは、おもにビジネス分野で通訳サービスを行う *liaison interpreting* (Pöchhacker, 2004) としての日英ビジネス通訳者である。ビジネスの通訳現場は、交渉に見られる *inter-social* として分類できる場面の通訳のみならず、社内会議や非公式な社内の会議などの *intra-social* な場面にも含まれている (Pöchhacker, 2004)。

新たにインタビューを行った通訳者が活躍する業種は、前稿同様、主に情報通信・金融・製薬業界であり、ビジネス通訳の場面は、フリーランス・社内通訳を問わず、社内の関係者間で通訳を行う場合 (*intra-social*) と、通訳者として会社と社外 (他社や官庁など) の関係者間の通訳を行う場合 (*inter-social*) を含んでいる。海外の本社、並びに海外の本社から派遣されている非日本語母語話者と日本人スタッフ間の社内会議の通訳、社内の非日本語母語話者が日本人顧客や国内の監督官庁を訪問する時の通訳、海外企業と日本企業との折衝等の通訳が主である。

今までインタビューに応じた参加者の内訳は表 1、継続調査への参加者は表 2 に示したと

おりである。インタビュー参加者は、主に通訳者からの紹介とエージェントのメーリングリストによる告知による応募であった。参加の基準は「ビジネス領域で稼働している通訳者」という要件を満たしていることである。結果的に、12名の通訳者が主に稼働している業種が一致し、「情報通信・金融・製薬」であることは、やや限定されているように思えるが、以下の考察でふれるように、偶然ではないと考えられる。

表1 前稿のインタビューに参加した通訳者

略称	IJ	NG	MO	IZ	TD	AZ	ME	ON
主な分野	情報通信	金融	金融・証券など	情報通信	製薬	情報通信	製薬など	情報通信・金融
稼働形態	フリーランス	社内通訳	フリーランス	フリーランス	社内通訳	フリーランス	フリーランス	フリーランス
通訳歴	4年	20年	10年	17年	13年	5年	15年	5年

表2 継続調査のインタビューに参加した通訳者

略称	DR	BA	KM	KF
主な分野	製薬・IT・金融	製薬・IT	ITなど	金融
稼働形態	フリーランス	フリーランス	フリーランス	フリーランス
通訳歴	20年	15年	20年	15年

インタビューは10項目の質問からなる構造インタビューの形式で実施した。以下は本稿で取り上げた項目のみ記載する。インタビュー時間は、人によって差があるものの40分から60分であった。

1. 英語ができるのに、相手や場面によって、あるいは対話の中でその時々によって通訳者を使ったり使わなかったりするクライアントについてありますか？
2. 具体的にはどのような状況のときに、そのようなことがありましたか？
3. クライアントはどのような理由でそうしたのだと思いますか。またこのような使い分けの状況をどのように思われますか？
4. そのようなクライアントとは、どんな人たちだと思いますか？
5. 通訳者から見て、通訳者を使った場合の、メリットを教えてください。

一方、クライアントの募集に際しては、通訳エージェントの協力を得ることができなかったため、通訳者同様、通訳者からの紹介によって行った。また知人、友人などで通訳者と一緒に仕事をしている人を探し、参加者を集めた。条件は「仕事で通訳者と一緒に仕事をしたことがある」とした。インタビュー協力者を探す過程で、職場で英語を使うことが予想されたとしても、通訳者使用の有無を尋ねると、業種が商社やメーカーや貿易関連などの場合には、通訳者を使っていないということが多かった。協力を得ることができた6名のクライアントの業種は、5名が「情報通信・金融」であり、1名 (ty) のみメーカーである。

表 3 インタビューに参加したビジネスクライアント

略称	sh	ty	tk	uh	gm	nk
業界	金融	メーカー	ITコンサル ルタント	金融	金融	IT
年代	50代	60代	50代	50代	50代	40代
TOEIC	900点台	600点台	800点台	900点台	600点台	900点台
備考	MBA	Ph.D.	MBA	MBA	NA	NA

クライアントへのインタビューも構造インタビューの形式で実施し、11 項目の質問から構成されている。以下は本稿で取り上げた項目のみ記載する。クライアントのインタビュー時間も参加者により差があり 30 分から 50 分であった。

1. 通訳者を使ったことがありますか？通訳者と一緒によく仕事をすることがありますか？頻度はどれくらいですか？
2. どういった場面で通訳者をお使いになりますか？ビジネス目的ですか？例えば、正式な会議、社内のミーティング、社外の交渉など？
3. 英語はどれくらいおできになりますか？さしつかえなければ、英語のレベルをお教えてください。TOEIC などの資格でも構いません。〇点台とおっしゃっていただけましたら、十分です。
4. 通訳者なしでも、英語で外国人とやりとりができますか？
であるならば、どうして通訳者を使うのですか？そしてそれはどのような場面、時ですか？
5. 通訳者と使った場合の、メリットを教えてください。

4 の「通訳者なしでも、英語で外国人とやりとりができますか？」という問いは本研究の研究課題である「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか」という問いの確認のために、加えた質問である。基本的には、通訳者に対する質問とクライアントに対する質問は同様のことを尋ねる目的で作成したが、立場が異なることによって、若干質問に差がある。

また質問の回答は、2 の中ですでにメリットが語られていることもあり、メリットのところを使い分けに関する具体例が出るなど、回答が混在することがあった。これらの点は分析の際にも記した。

前稿では、通訳の行われる接触場面を通訳場面として設定したうえで、そもそも通訳を用いるか否かを事前に判断する「通訳場面向かう言語管理」と通訳をどのように用いるかに関する「通訳場面における言語管理」に分けて考察し、使い分けに注目した。本稿においても、同様の分類を用い、既存の分類に該当する新情報を付加したうえで、既存の分類では該当しないものに関しては、新たな項目を設けて、そこに分類する。

クライアント側のインタビューに関しても、通訳者のインタビュー結果の分類項目に従って分類を行い、通訳者が報告していることと一致が見られるかどうか検証を行い、齟齬があった場合には、どんな観点から報告が行われているのかに焦点を当てて分析を行う。

表 3 の参加者リストによれば、3 名は MBA の保持者であり、TOEIC もそれぞれ 600 点台か

ら900点台であることから、「英語ができる」クライアントに分類できる。したがって「英語のできる人が、なぜ通訳者を使うのか」という問いの答えを得るために適していると考えられる。

3. インタビューの分析結果と考察

3.1 通訳者の使い分けに関するインタビューの分析結果

今回の調査に参加した4人の通訳者も全員が、前稿同様、通訳稼働時にクライアントによる通訳者の使い分けを経験しているということであった。以下は前稿による分類項目である(表現を一部、変更して簡潔にしている)。

I. 通訳場面に向かう言語管理

1. 場面の性格に応じた使い分け(公式度)
2. 心理的な理由による使い分け(不安・正確性)
3. 負担軽減のための使い分け(時間・労力)

II. 通訳場面における言語管理

1. 時間の経過による使い分け
 - ① 通訳を使っていたのに、途中から通訳を使わず自ら話す場合
 - ② 通訳を使っていなかったのに、途中から通訳を使うようになる場合
2. 訳出の方向による使い分け
 - ① 通訳者は英語を日本語に訳し、英語はクライアントが話す場合
 - ② 通訳者は日本語を英語に訳し、英語はクライアントが聞き取る場合
3. 話の内容(話題)による使い分け
4. 参加者による使い分け

以下では、本研究で新たに新たに出た付加情報を各項目に沿って分類し、クライアントのインタビューの結果とともに報告する。今回の調査の結果、「I. 通訳場面に向かう言語管理」の項目では、「4. 相互行為の分担(間の利用・責任)」として把握できる事象の報告が見られ、この項目を新たに分類項目に加えた。また前稿で、下位分類するに至らなかったII-3、4については、拡充されたデータをもとに、どのような場合がみられるかを整理する。

I-1 場面の性格に応じた使い分け(公式度)

本項目に関して、通訳者については前稿の調査結果とほぼ同じで、公式度による使い分けが確認された。クライアント側からも、やはり公式度による使い分けが報告された。例えば、「アメリカのエクゼクティブが日本に来た時に、比較的多くの社員を集めて意見交換をするような時には通訳が呼ばれる」(tk)ということだった。これは最初から、通訳を使うことを前提として会議が行われるということである。たとえば、「『200人日本人 [社員] が集まりました。それに関して講演します』という時には [自分は英語ができて普段は英語を使っている] 日本語で質問をする。[なぜならば] その方が全員に質問の趣旨がわかるので、敢えて日本語で話す」(tk)ということである。またこのような大勢の社員が集まる場合のみならず、少人数でも公式な

場においては通訳者が使われるようである。例えば、「アメリカの本社の比較的偉い社員が、日本に来てお客様を訪問する時」には通訳者を使う (nk) という。これは「お客様と本社の外人との間」のコミュニケーションを図るために使われるものである。社内でも、「アメリカ本社からVIP が来たときに主に会議に逐次通訳として通訳を使う」(nk) ということであった。

以上のように、本項目に関しては、「公式の場では通訳を使う」という通訳者の報告とクライアントの報告の間に齟齬は見られなかった。

I-2 心理的な理由による使い分け(不安・正確性)

次に、心理的な理由に基づく分類であるが、これは自分の聞き取りによる解釈の正確性に対する不安やその他なんらかの理由により不安をもつことで生じる使い分けの例である。本項目に関しても、通訳者からの情報は前稿とほぼ一致が見られた。

クライアント側からは、「ご飯食べている時には、間違ったことを言っても笑って済ませばいいけれど、ビジネスの時には、間違ってとられたら困るので、ビジネスの時には通訳を使う」(ty) という報告や「仕事のことは、間違って理解するといけないので、トライしない。仕事以外の簡単な会話は英語です」(gm)、さらに「ビジネスの時は難しい交渉があるので、できるだけ通訳者に同席してもら」(ty) という報告があげられた。下線部は「不安」と捉えることができ、これらの報告もやはり通訳者による現場の観察とほぼ一致していた。

I-3 負担軽減のための使い分け(時間・労力)

本項目においては、通訳者からさらに新情報として、「頑張ればできるのだけれど、『今日は疲れているから』とクライアントに言われたことがある」(KF) や通訳を使うことにより、「スピーディーに会議を進めることができる」(ON) また「[内容を] 理解することに集中できる」(ON)、「きちんと言葉を変えてつなぎわたしをする専門の通訳の人がそれを正確に出してくれるところ、楽ですよ」(ON) という意見が出された。また「難しい話になって面倒臭くなってくる」とまたふられたりする」(KM) という報告もあった。つまり通訳者側からはこのような時間や労力などのクライアントの負担を軽減するために、通訳者が使われていると感ずることがあるということである。

一方、クライアント側のインタビュー結果でこの分類に当てはまる報告は、「月曜とか週末英語を使わないとき、通訳を使いたくなる」(uh) という言及のみであった。この点を uh 氏は通訳を用いるメリットとしてあげている。この分類項目は、前稿も含めて通訳者からは数多くの観察が寄せられているのに対し、クライアント側からはあまり報告のないことが特徴的であった。

I-4 相互行為の分担のための使い分け(間の利用・責任)

前稿で未使用であった内容および継続調査で、「[通訳を使うことで] 時間稼ぎができる」(MO)、「逐次の時、英語はできるのだろうが、敢えて日本語にして、考えている。時間を稼ぎたいと言うことを言われたこともある」(KF)、「その間 [通訳者が訳している間に] に何秒間かあったら、自分の考えをまとめることができる」(ME) という報告があった。またさらに、必ずしも自身の経験ではなくともよく聞くこととして、「関係者が失敗した時に、通訳者を雇っていたら、通訳

者のせいにはできる」(ME) や「場合によっては、通訳のせいにはできる。そのように使われてしまうリスクはある。」(KF) という報告があがった。つまり英語で伝えることを通訳者に託すことにより、「間の利用」が可能になると同時に、内容の伝達「責任」を負ってもらうことも可能となるわけである。この点は、通訳者という相互行為者が加わることを考慮した使い分けであるため、新たな分類としてあげるのが妥当だと判断した。

一方、この点に関しては、クライアント側からも、「社外の交渉事、時間稼ぎ、言質をとられない。ちょっと解釈に違いがあったようで。自分が言ったのではないということになる」(uh) という報告があり、通訳者が伝聞として言っていたことが実際にあることが証明でき、通訳者の利用によって「責任の分担」をしていることがわかった。

さらに、「外人が一人、お客さんが日本人、私たちも日本人。お客さん日本人同士が日本語で話すこともあるのでそういう時に、通訳がウイスポリングしてくれる。同じ会社の社員と言っても、自分がわからず日本語で話しているのは気分のよいことではない。でも通訳を使っていると途中から話題に入ることが(ジャンプイン)できる」(tk) という報告があり、自分が本来なすべきことを通訳者に代行してもらうということで、これも「責任の分担」と考えられる。同様の報告としては、「[ミーティングなどで] 自分が司会をしなければいけないことがあり、司会をしながら通訳をするのは大変だから」(sh)、加えて、「自分が発言しなければいけないので、人の言うことまで訳していたら集中できない」(sh) ということで、ここでも通訳者に自分の責務を代行してもらえという点があげられている。さらに具体的に、「自分が通訳をやっていたらそれを [間違いを] なかなか指摘できない。集中できない。『ポイント違うんじゃないかな』なんていうときに、クライアントの立場だと [間違いを] 修正しやすい」(sh)、「自分が通訳をやっていると『話者が] 違う答えをしているな』と思ってもそのままささなくてはいけない。訳した後に、『今言っていることはこういうことだと思いますよ。』と一人二役をやらなくてはならない」(sh) という報告もあげられた。これを sh 氏、tk 氏は通訳者を使うことのメリットとしてあげている (3.2「メリット」の項を参照)。

別の観点からの類似の報告としては、「基本的に、現場の技術用語ばかりなので、背景でわかる。バックグラウンドが高いので、単語で拾って理解できる」が、だからと言って、「自分では、通訳をやるほどではなかった。[自分が] 言いたいことは言えるが、1時間続けて [通訳が] できるかというそれはできない。ただ単に右から左に訳しても通じない [のが通訳というものだと思うので]」(nt) というような事例も報告された。これも相互行為者がさらに加わることによる「責任の分担」に分類することができる。

以上のように、この項目は、通訳者よりもクライアントから多く、かつ具体的にあげられた。とりわけ、自ら通訳ができるほど英語力があるクライアントがそれでも通訳者の利用を選択する理由として、この項目は注目に値する。

II-1 時間の経過による使い分け

前稿では、途中から通訳を使わなくなる場合と、途中から通訳を使うようになる場合が報告された。本項目に関して、通訳者から新たな付加情報はなかったが、クライアント側からは、「片耳のみイヤホンをつけて、片耳で原語を聞いている時に、違った訳が聞えてくるとうっとうし

い [ので、イヤホンをはずす](ty) や「わかっている表現であったり専門分野だったりする時に、専門用語を無理やり日本語にしたりすると、通訳が雑音になることがある」(ty) という意見があった。さらに「自分がわかる瞬間になった時に、通訳が雑音になることがある」(ty) という意見もあった。これは下位分類の①「通訳者を使っていたのに、途中から通訳者を使わずクライアントが話す場合」の例である。逆方向の時間による使い分けについては、具体的な例は挙げられなかった。

II-2 訳出の方向による使い分け

前稿においては、発表は英語でできるが質疑の聞き取りが難しいので英語を訳すことが求められる場合や、逆に聞いた方がわかるので日本語のみを英語に訳す依頼があるということが報告された。本項目においても、通訳者から特に新たな付加情報はなかったが、クライアント側からの報告として、tk 氏より、「通訳なしでもやり取りはできるが、100%わかるわけではない」(tk) とのコメントがあった。総じてやりとりができるという意識を持っていても、聞きとりに問題があった場合に①英→日の通訳に頼るといえることがあるようだ。逆に、②日→英の方向については、「簡単な会話は聞くことができるけれど、話す方が苦手」(gm) や「英語で表現できることと日本語で表現できることの間には差があればあるほど、通訳を使う」とのコメントがあった (tk)。また tk 氏は「アメリカで MBA を取得しているが、だからと言って、英語ですべてのことを日本語のように表現できるというわけではなく、母語の日本語であれば、細かく説明できることでも、英語になるとそれができなくなり、その差が大きいほど、通訳者を使う」ということであった。tk 氏の例のように、同じクライアントでも、どちらの方向の通訳を必要と感じるかが場合によって異なる可能性も浮かび上がった。

II-3 話の内容(話題)による使い分け

前稿では、込み入った内容を説明・理解したい場合や微妙なニュアンスを伝達したい場合などに通訳が用いられることがあげられた。また仕事の内容以外の話題にしばしば困難な状況がみられる場合も報告された。今回の調査でも、通訳者側からは、「ニュースでも、経済のことはわかるけれど、政治とか特色があるような話はあまり英語で話そうとしない」(DR)、「業界の話以外の詳しくない内容に関してオピニオンを求められた時、そこまで想定していない内容の場合」(BA)、また「テクニカルのところは自分でやってしまうことがある。突然、テクニカルな話が終ると [日本語に] 変わる」(KM) という報告があった。また、「ビジネス英語は話せる、だからと言って、英語が流暢なわけではなく、専門用語を話せる程度の日本人の役員の通訳などをするわけですが、細かい話、微妙な話、複雑な話、日本文化と外国文化、細かく言うと、日本の企業文化と外国の企業文化の違い、ギャップを埋めるのができていない役員が多い」(DR) という報告も挙げられた。

さらに、通訳が用いられるのは「是非このプロジェクトを」などというお願いの時や、エモーショナルな時が多く、その中でも「お願いが多い」(BA) という新情報も付加された。また「交渉の時、ベンチャープロジェクトなど数字は、英語で話していて日本語になります」(BA) という新たな情報もあった。

クライアント側からも、「ある程度、英語力があっても、数字に関しては、換算も含めて苦手である」(ty)、「大きな数字はドルだといくらになる、それを英語にするといくら？と考えていると時間が過ぎてゆく」という報告があり(ty)、数字という具体的な点に関して、通訳者、クライアント双方に同様の報告が見られた。

内容による使い分けの場合には、①数字や単位などを含めて、内容が込み入っていたり複雑であったりする時などで、それに当たる日本語を英語では表現・理解しにくい場合と、②仕事に関する内容を離れて、日本の文化や社会、生活に関する説明が英語でできない場合に分けて考えることができるようである。

②に関して、逆に、クライアントからは、仕事の専門的な内容に関するときに「通訳者の訳ではコンテキストが抜けていて [聞いている外国人が] わからない時がある」という報告もあった。この場合、通訳者の訳出に「お客様(日本人)がおっしゃったことはこういうことを言っているという具合に、かみ合わなかった時に [英語で] 仲介に入る」(nk) とのことである。「[通訳者の訳出では] 頓珍漢になってしまうためにクライアントが介入し、日本語のわからない参加者に [訳出後に] 英語で説明や補足を行うことがある」と説明された。普通はクライアントが困って通訳者に頼るのでこのような場合は想定外かもしれないが、これも事実上、「内容」による使い分けに含めて考えることができる。

II-4 参加者による使い分け

前稿では、参加者のほとんどが日本人で日本人を中心として行われる会議に日本語を解さない人が参加する場合、部分的に通訳が用いられることが報告された(ON)。今回の継続調査でも、「日本人の参加者が多い。主要な相手が日本人である。外国人が入っていたとしても大多数が日本人。混合」(KF) である場合、「『日本人同士なので、日本語で行きましょうかね。訳してもらいましょうかね。外国人がいますけれど』という依頼を受けた」(KF) という報告があった。また前稿未使用データでは、「複数の方がいらっしゃって、英語がよくおできになる方と、そうでない方がいらっしゃって、人によって使ったり使わなかったりということがあるんですが、人によって違ったりするんですが」(ON) と、日本人側の英語能力の差にもふれられていた。今回のインタビューでも、「[日本人参加者の] 英語のレベルは一定ではない」(KF) 場合に通訳者が使われる、と類似する言及があった。

本項目に関しては、通訳者からは ON、KF の上記の報告以外は関連する言及がなかったのに対して、クライアント側からは、さまざまな報告が挙げられている。「日本人の同僚によりわかってほしい時には日本語。外国人を説得したい場合には最初から英語の場合もある」(uh) という報告は、相手によって、クライアントが使用言語を変える場合である。それに応じて通訳を必要とする人も変わってくる。このような参加者による使い分けは多く報告されたが、場面のタイプは総じて、通訳者からあげられたものと同様であった。「社内ビジネスミーティング。参加者が多い会話。大多数が日本人。外国人がそれを聞いている」(gm)、「[社内で] 英語のできないセクションがあり、日本語で会議がある。その場に外国人を連れて行くときがある」(tk)、あるいは社外とのコミュニケーションについても、「[日本人のお客さんと日本語で] 意見交換ができることが目的なので、かなり英語ができる人でも、[外国人が同席する場合] 自分から英語

で話したいという人は少ない」(tk) から通訳を使うという報告は、会議の主な参加者を基準とする言語使用についてである。日本人の英語能力についても、「基本的には英語でやるが中にできない人がいるため」(sh)、「全員のレベルが同じでなく、通訳を必要とする人が何人か存在する場合」(sh)、また「自分一人の場合には、通訳を使わない。英語があまりできない人が出席している場合」(uh) 通訳を使うということであった。

通訳者を使うか否かが参加者によって異なる場合は、大きく分けて、①会議の中心となっているのが日本人なので日本語で話したいが、日本語が理解できない参加者がいるので、その参加者のために通訳が必要である場合と、②英語を進めることを基本としつつもグループの中に英語があまりよくできないメンバーがいる場合、という 2 つのパターンがあることがわかる。このように参加者による使い分けも、下位分類することができる。

3.2 通訳者を利用することに関するメリット

以上、「使い分け」の分類ごとに継続調査による新情報と、同じ項目に関するクライアントからの報告をみてきた。次に、この使い分けの理由を踏まえて、英語のできるクライアントが通訳を用いる場合のメリットとしてあげられた内容について検討する。前稿では、使い分けの際に通訳を利用した場合のメリットに関しては、報告から関連する内容を抽出するのみであったが、本稿では、既出のもの通訳者およびクライアントからの新情報を加えて、メリットについても分類を行った。なお、一部はすでに上記の分類項目の中で使い分けの理由として紹介している。このように、通訳者を用いることを選ぶ理由は、通訳のメリットと密接に結びついている。

i 円滑かつ正確なコミュニケーション

前稿では、通訳者の存在による「スムーズなコミュニケーション」(MO・IJ・NG) や「内容の正しい伝達」(IZ) に関する言及をとりあげた。内容を正しく伝達してもらうことによりミスや誤解を未然に防ぐことが可能であるという点は、12 人の通訳者たちの主な活動の領域である金融・情報通信・製薬においては特に重要なことであり、その目的が達せられることがメリットになるというのが通訳者側からの見方であった。

継続調査の新情報としては、「通訳者を利用すると、逐次通訳の場合は、時間が 2 倍かかることがデメリットになると考えられる」(ON) が、逆説的ではあるものの「訓練を受けた通訳者が入って、ちゃんと準備をして臨めば、円滑に会議を進められれば、すごくスピーディーに会議を進めることができるということがあります」(ON) との指摘があがった。これは最終的には、時間・経費ともに削減につながるメリットである。その実例として、「当局(監督官庁)と話がこじれてトラブルになっちゃった時に、通訳者が初めて呼ばれていくときがある。ずっと聞いているとずっと昔の段階で言っていることが理解できていないのだけれど、もう少し早い段階で通訳者を入れてくれていたら、ここまでこじれることはなかったのって思うことはあります。そうすると、すでに 2 年の承認がずれているというけれど、承認が予定通り出たかもしれない。だからこういう研究はされてはいないけれど、おそらく経済的にもメリットもあると思う」(ME) という報告があった。

「正しい伝達」という観点では、「[通訳者は] 橋渡しができる、変な問題を早い段階で取り

除くことができる」(DR) という指摘もあった。これも早い段階で誤解などがみつきそれを正しく伝達することで、大事になる前にその問題を回避できることで節約につながるであろう。また「自分ではこういうつもりで、英語で言ったつもりだったのに、何か誤解をされたっていうことがなくなりますよね。母語で喋れば確実に自分の思っていることを伝えられるから、じゃあ、それをきちんと言葉を変えてつなぎわたしをする専門の通訳の人がそれを正確に出してくれるというところは、楽ですよ。」(ON) と、「スムーズなコミュニケーション」と次節で述べる「認知機能の面」での両方からのメリットが挙げられた。

「プロの通訳者というのは、コミュニケーションをすべての面で完全にこなせる」(DR) と通訳者全般に関するメリットをまとめた報告もあった。通訳者は「コミュニケーションという言葉の中には、空気を読むなど、様々な要因 [が含まれる]」(DR) という。またそのことを具体的に「通訳者は、リピーター [の通訳者] が来る場合には、字面だけではなくて、目的とか意図とかもそういうことも含めてきちっと訳していて、一見、言葉通りに訳している部分があったとしても、その部分を考え訳しているから、その部分をどうやって話をつなげていくかっていうそういうことも明示して、その部分で何を言っているのかということがよくわかると思う」(ME) ということが前述の「コミュニケーションをすべて面で完全にこなせる」(DR) ということであろう。「自分の言葉、意思を的確に伝えてくれる」(BA) という報告もあった。

一方クライアント側からの報告でも、「相手の言っていることをきちんと [正しく] と理解できる」(gm)、「こちらのニュアンスをきちんと伝えなければいけない時がある」(ty) という通訳の本質であり、一見、当然のことのように思えることをこえて、「日本語でもきちんと表現しにくいことをその場の空気の中でくみとってくれて英語にしてくれる」(ty) という報告もあり、意図をくみとって訳すという、通訳者からの報告と対応していた。これ以外には本項目に分類できる報告は、クライアント側からはあがっていない。

ii 認知機能の確保

母語と、後から学んだ言語では、多くの場合、後者の方が不自由を感じることもある。ヴァイト (Weydt 2003: 176) は、母語話者と非母語話者がコミュニケーションをとるときの非対等性について次のように述べている。

“the disadvantage of the non-native speaker is not only that he is less able to express his ideas, but he is also less able to develop what he wants to say. In a certain sense, he not only seems to be less intelligent, but he also is less intelligent.”

このような認知機能の面に関して、「母語である日本語で聞けることが楽である」(TD) というメリットを実際にクライアントから言われたという報告や、「集中して、もう理解することに集中できるっていうのは、たぶん大きいメリットになるんじゃないかなって思いますね」(ON)、「母語の方が楽。日本語でいろいろ言いたいことがある。それを英語にできないことはない」(ME) との報告があった。

クライアント側からは、認知機能の面ではあまり報告はなかったものの、「月曜とか週末日本

語を使わないとき、通訳を使いたくなる」(uh) という報告は、明らかに認知面でのメリットを示しているものである。「負担の軽減」の項目で既にとりあげたが、uh氏はこれをメリットとしてあげている。「[通訳者の] 質がよければいてくれると楽。全部訳してくれるから」(sh) という報告もメリットは認知面であると解釈できるであろう。通訳者がいることで、クライアントは認知機能がより発揮できるといえる。

iii 時間稼ぎ

逐次通訳の場合は、時間がかかることがデメリットと考えられるが、逆に、「英語のできる人も通訳者がいることで時間稼ぎができる。2回聞けるから、自分の聞いた内容が通訳者の内容を聞いて確認できるし、その間に何秒間かあったら、自分の考えをまとめることができる。それをうまく使っている人もいるかな」(ME) ということがメリットとしてあげられた。また英語が理解できている場合には、通訳者の訳出にすべて頼らず、それを聞かないでその間に次に話すことを考えることができるという。通訳者から「時間稼ぎ」(MO) に関する指摘は他にもみられた。ただし今回のクライアント側のインタビューの報告では、このような報告は特になかった。

iv さらなる相互行為者

すでに使い分けの理由でも言及しているが、クライアント側から挙げられたメリットとして、相互行為の分担がある。英語ができるという理由で、社内で通訳をしなければならないような場面に直面した際、「[この発言は] ポイントが違うのではないか?」「間違っているのではないか?」と思いながら訳すようなことがあっても、通訳をしていると発言を修正することができない。もしくは訳してからまた修正するなど、たいへん煩雑で面倒な作業である。ところが、その場で通訳者が訳していれば、発言内容の修正も可能になるという (sh)。また通訳をしなくてよいので、自分の意見にも集中できると言う (sh)。

社内の外国人を伴い日本人顧客を訪問する際にも、通訳者が同行していれば、顧客と日本語で話していても、それを通訳者が外国人に通訳してくれるし、また外国人と英語で話していても、それを自分で日本人に日本語で説明しなくても、通訳者が通訳してくれることがメリットであるという (tk)。日本人だけが中心となって話を進めている場合にも、通訳者の存在があれば、それをウイスパリングしてくれるので助かるという点もメリットとして挙げられている (tk)。これらの視点は通訳者からメリットとしては報告がなかった。

v 仲介的な同伴者

仲立ちをする同伴者がいることによる精神的な面におけるメリットも報告された。本項目では、「通訳者は、ワンクッション置くからそこで、緊張状態の時には緩和されるっていうのはあるのかな」(ME) との報告があげられた。この点に関しては、通訳の役割ではないと前置きしつつも「年配の男性なんかの会議だと、まだまだクッション役のような感じで呼ばれることも」あり、それがメリットということもあるとの報告もあった (TD)。これに関しては「少なくなったけれど」と加えられた。同様に「過激なものは過激なままぶつけなくちゃいけないんですけれど、ちょっと調整したり」することがある (TD) ことがメリットという報告もあげられていた。さらに精神的なサポートと

いう点に関しては、「一人だけ日本人である場合、同じ母語の人がいることが心強い。一人のときに、母語ではないけれど、自分の国の言葉のわかる人がいる安心感があるか」(KF) という報告があった。クライアント側からは、この分類に該当する報告は得られていない。

vi 情報源

通訳者からは、通訳以外に、情報源としても活用されるということが報告された。たとえば、「[アジアの人だとあまり考えや感情を外に出さないの、そこから察することができず] 今日のミーティングどうだった？」(BA) と通訳者に聞いてくることがあるとのことで、これもメリットの項目で報告された。同様の報告として「[日本で施行された] 新しい法律など細かい話、インサイダー的なこと、動きをビジネスだけでなく、特にその通訳者が知っている場合など」(BA) クライアントが通訳者に聞いてくることもあり、そのことが通訳者を雇う場合のメリットになることがあるという。さらに通訳のテーマに関するだけでなく、「生活の面倒ではないけれど、駅の近くは騒音があるなど、車が多いなど現地の情報を与えることができます。例えばベジタリアンだった場合、このカフェがいいとかここは落ち着くという現地の情報を与えられます」(BA) という報告があった。この項目に関しても、今回のクライアント側からのインタビューではメリットとしては特に言及はなかった。

4. まとめと今後の課題

本稿では、前稿の継続調査として、通訳者への構造インタビューを続けた結果から、新情報を報告した。さらに、同様の質問をクライアント側に対して行うことで、通訳の使い分けの理由を確かめて適宜拡充するとともに、使い分けの理由や通訳を使うメリットに関して両者の報告や観察に齟齬がないか、またあるとしたらどこが異なるのかを調査する目的で研究を行った。その結果、両者の報告は概ね一致していたが、通訳者に多く見られた報告とクライアント側に多くあげられた報告に違いのある項目もみられた。さらにメリットに関しては、両者の間でメリットとしてあげられたことに、差が見られた。

4.1 通訳の使い分けの理由および通訳利用のメリット

継続調査に参加した通訳者 4 名も全員が通訳稼働時に、通訳者の使い分けを経験しているとの報告がなされた。これで参加者 12 人全員が通訳者の使い分けを経験していることになり、これは決して珍しいことではないということがわかる。それぞれの報告を分類する際にも、分類項目に基本的には大きな相違点は見られなかった。しかし若干、異なる基準による事象が報告された。従って、I に「4.相互行為の分担(間の利用・責任)」が分類項目として付加された。また通訳場面における言語管理については、さらなる下位分類がなされた。改めてまとめると、次のようになる。

I. 通訳場面に向かう言語管理

1. 場面の性格に応じた使い分け(公式度)
2. 心理的な理由による使い分け(不安・正確性)

3. 負担軽減のための使い分け(時間・労力)
4. 相互行為の分担のための使い分け(間の利用・責任)

II. 通訳場面における言語管理

1. 時間の経過による使い分け
 - ①通訳を使っていたのに、途中から通訳を使わず自ら話す場合
 - ②通訳を使っていなかったのに、途中から通訳を使うようになる場合
2. 訳出の方向による使い分け
 - ①通訳者は英語を日本語に訳し、英語はクライアントが話す場合
 - ②通訳者は日本語を英語に訳し、英語はクライアントが聞き取る場合
3. 話の内容(話題)による使い分け
 - ①平易な内容はクライアントが英語で話し、複雑な内容は通訳を使う場合
 - ②業務的なやりとりはクライアントが行い、それをこえた内容に通訳を使う場合
4. 参加者による使い分け
 - ①日本人中心の会議に日本語ができない参加者が加わる場合
 - ②参加者の中に英語能力の多様性が見られる場合

新しく加わった相互行為の分担という分類は、Marx & Nekula (2014) において指摘された、ドイツ語もチェコ語もできるチェコ人のメンバーが通訳を兼ねさせられることで、議論への参加が制限されるため不利な立場におかれるということと対応する。言語的な仲介がなされることのみならず、通訳者という存在が加わることにも価値があることが示唆される。通訳場面における参加者による使い分けという観点からも、通訳者が加わることで、クライアントが通訳的役割を担わなくてもよくなるため、通訳者も参加者の一員として捉えるのが妥当だろう。Alexieva (1997) の分類では、参加者の分類を *primary participants (Speaker and Addressee)*、*secondary participants (Interpreter, Organizer, Moderator)* としているが、使い分けに関しても *secondary participants* の意義を考える必要がある。

これらのことを踏まえ、分類項目を再考すると、表 4 のように個人的要因と集団的要因に分類することが可能である。個人的要因は、クライアントに一定の英語能力があったとしても、限界があることから、通訳者に期待されるというものである。それに対して、集団的要因は、その場の性質や参加者構成の事情によって通訳者が必要とされる。「英語ができる人がなぜ通訳を使うのか？」という問いに関しては、クライアント個人の能力に関わらず、通訳者の存在が意義を持つ集団的要因がとりわけ重要だといえる。相互行為の分担や参加者による使い分けが、クライアントの方から多くあげられたことは、クライアントの方が、通訳者を *invisible (Angelleli, 2003)* な存在としてではなく、その場の構成員としてみなしていることを示唆する。逆に、通訳者自身には、自らの構成員としての位置づけは意識されにくいのかもかもしれない。

表 4

I.通訳場面に向かう言語管理	
個人的要因	集団的要因
2. 心理的な理由による使い分け 3. 負担軽減のための使い分け	1. 場面の性格に応じた使い分け(公式度) 4. 相互行為の分担のための使い分け
II.通訳場面における言語管理	
個人的要因	集団的要因
1. 時間の経過による使い分け 2. 訳出の方向による使い分け 3. 話の内容による使い分け	4. 参加者による使い分け

一方、負担軽減のための通訳の活用や通訳を用いることのメリットに関しては、クライアントよりも通訳者から多様な点について言及された。クライアントは、通訳者を主に言語的な変換を行う存在として認識しているのに対して、通訳者自身の方が、それ以外の役割をも期待されている、あるいは担っていることについては意識しているようだ。

通訳者を利用するメリットとしては、通訳の本分ともいべき i 円滑かつ正確なコミュニケーションの他にも、ii 認知機能の確保、iii 時間稼ぎ、iv さらなる相互行為者、v 仲介的な同伴者、vi 情報源、という項目が見出された。これらの点が、まさしく本稿の問いでもある「英語のできる人がなぜ通訳者を使うのか？」という問いの答えとなると考えることができる。一般的に考えると、英語ができれば、コミュニケーションに困らないであろうと予測されがちであるが、実際には、より厳密で正確なコミュニケーションを求めている場合もある。これは特に情報通信や金融では非常に重要な点である。これは前稿のインタビューに応じた通訳者からの証言に見られたように、ちょっとした間違いが最終的に時間的、経済的に莫大な損失をもたらし、取り返しのつかないことになるという事例として、提示されていることから明白である。また英語が母語でないことによる認知機能の確保や時間稼ぎが可能であるというメリットも存在しているのである。さらに、相互行為の担い手や同伴者や情報源という、より積極的なその場の構成員という役割もビジネス通訳においては求められることがある。

通訳を用いるかの理由との関係では、メリットの i は I-1(公式な場で用いること)、I-2(心理的な理由)、I-3(負担軽減のため)にかかわる。ii は I-2 と I-3 と、そして iii、iv は I-4(相互行為の分担)で挙げられたこととつながる。これに対して v、vi は通訳者を雇う理由として挙げられないものの、通訳者を雇った場合の付随的な価値といえよう。

先行研究と比べてみると、会議通訳を考察した Reithofer (2013) では、“less formal, dialogic interactions”では聞き返しを含めた細かいやりとりがしやすい ELF (English as Lingua Franca) が有効であり、“monologic communication”では母語でよりよく理解できる通訳が効果的であるため、この二つの手段は対立するというよりは補完的であるという結論であり、Marx

& Nekula (2014)は、組織内では効率優先で共通語に頼るのに対して対外的には対等性を示すために通訳が用いられる傾向を提示したが、ビジネス通訳の場合、より複雑であることが明らかである。

4.2 今後の課題

本稿では、さらなる通訳者とクライアントの視点をあわせることで、使い分けやメリットのより包括的な理解が得られ、英語のできるクライアントがどのような理由でどのように通訳者を用いているか、またそのメリットは何かを当事者の視点から複合的に提示した。限られた人数の構造インタビューの結果を分析した結果に基づいて論じたものであるという限界があるが、本稿の問いに一定の答えを出すことができた。ただし、「通訳場面に向かう管理」も「通訳場面における管理」も、なお異なる具体的な使い分けの理由がありうる。また「役割論」考察の手がかりともなる「メリット」に関しては、本稿では報告されたことを簡単に分類して紹介することに留めたため、さらに詳しく調査し分類したいと思う。

その際、通訳者の調査に関しては、母語による違いはないかという点も考慮する必要がある。今回の調査は、2名の英語母語話者の通訳者が含まれていたが、メリットの点で言語以外のことに関する言及が見られたのは主にこの2名であった。今後は英語母語話者の通訳者にインタビューを行い、継続調査をしたい。この点を掘り下げることは、通訳者を考える上での Alexieva (1997) の分類である *universality vs. culture-specificity of interpreter-mediated events* や Roy (1993) の定義に基づく通訳者を *bilingual specialist* として考えるのか、*bicultural specialist* として考えるのか、その具体的な例として検証できる可能性もある。

クライアントについては、今回は製薬業界のクライアントのインタビューができなかったため、今後の課題として、さらに製薬業界のクライアントへの継続調査を行いたい。

また通訳者とクライアントの視点の相違に関しては、今後の継続調査の中で、クライアントが言及した使い分けの理由、とりわけ相互行為の場面の構成員としての通訳者の位置づけは、通訳者にどの程度意識されているか、また通訳者から報告されているメリットは、クライアントもメリットと感じているかという確認も必要である。今回のインタビュー調査において、クライアントがただ単にその点に触れなかっただけで、具体的に聞くと、メリットと感じている可能性も否定できないし、言及がなかったことから、感じていない可能性も考えられる。

さらに通訳者とクライアントの双方について、メリットだけではなく、デメリットに関しても分析を行い、メリットとの関連性を調べ役割につなげる必要がある。使い分けの理由とメリットの関連性についてもさらに掘り下げることができよう。とりわけ通訳利用の付加価値とも考えられるような点については今後、さらに分析する必要がある。

また別の視点として、通訳を分類する上でのパラメーターとして Alexieva (1997) も言及しているが、通訳者の接触場面を考えた場合、力関係や社会的な地位の違いの観点からも、その使い分けの分類が可能であろう。電話会議を含む社内会議 (*internal*) は「平行の場面」を考えると、本社からの(外資系)幹部などの訪日の際の会議・日本人顧客・取引先訪問 (*external*)・監督官庁(から)の訪問 (*external*) は、「垂直(上下)の場面」と考えることができる。

前稿の最後でふれた、管理の具体的な過程の調査も引き続き課題である。クライアントはどこでどのような言語管理を行うのかは、実際の観察が難しいので、具体的な場面を思い起こしてもらいインターアクション・インタビュー (村岡 2002) が有効と考えられる。

最終的には、ビジネス通訳の「役割」も含めて「通訳とは何であるのか」という問いをさらに追及し続けたいと思う。

.....
【付記】

本稿は、2018年3月に神戸・松蔭女学院大学で開催された日本通訳翻訳学会関西支部第47回例会における研究発表を元に原稿にしたものである。

【謝辞】

本稿の執筆にあたって、インタビューに応じて下さったプロ通訳者のみなさま、クライアントの方々、貴重なご意見を賜りました支部例会参加者のみなさまに、心からお礼を申し上げます。お忙しい中、本当にありがとうございました。

【筆者紹介】

高橋絹子(TAKAHASHI Kinuko) 上智大学国際言語情報研究所準所員・外国語学部非常勤講師。専門は応用言語学、音声学。上智大学外国語学部ドイツ語学科卒業後、銀行勤務を経て、フリーランス英語通訳者。2013年上智大学大学院博士後期課程言語学コース修了。

連絡先: kinuko@dc4.so-net.ne.jp

木村護郎クリストフ(KIMURA Goro Christoph) 上智大学外国語学部教授。専門は媒介言語論、言語管理研究。主な著書に『多言語主義社会に向けて』(共編著、くろしお出版2017)、『節英のすすめ - 脱英語依存こそ国際化・グローバル化対応のカギ!』(萬書房2016)がある。

連絡先: g-kimura@sophia.ac.jp
.....

【註】

¹ 通訳研究を含めて、媒介手段ごとに個別に研究が進められてきたため、異なる種類の言語的媒介手段相互の接点が積極的に模索されたり、比較が試みられたりすることはあまりなかった(木村他 2013:81)。

² 社会的にも注目を集めた代表的な事例として三木谷(2012)。これに対する批判的な考察として、柿原(2012)。議論の概要については中原(2016)参照。

【参考文献】

柿原 武史(2012)「書評 英語公用語化論はなぜ繰り返されるのか」『社会言語学』第12号: 235-245.

木村護郎・クリストフ・泉邦寿・市之瀬敦・リサ フェアブラザー・シモン テュシェ(2013)「比較媒介言語論序説」『Sophia Linguistica』第 60 号: 81-103

三木谷浩史(2012)『たかが英語！』講談社

村岡英裕(2002)「質問調査 インタビューとアンケート」J.V.ネウストブニー・宮崎里司編著『言語研究の方法—言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために』(pp.125-142)くろしお出版

中原功一朗(2016)「日本の職場における英語使用の現状と将来展望」『自然・人間・社会 : 関東学院大学経済学部総合学術論叢』第 60 号: 95-117.

高橋絹子・木村護郎・クリストフ(2017)「だれがいつどこで何のために通訳を使うのか—日英ビジネス通訳の事例から—」『通訳翻訳研究への招待 17』(電子ジャーナル) 第 17 号: 1-19.

Alexieva, B. (1997). A typology of interpreter-mediated event. *The translator* 3 (2). 153-174.

Angelleli, C. (2003). The Interpersonal Role of the Interpreter in Cross-Cultural communication. A survey of Conference, Court and Medical Interpreters in the Us, Canada and Mexico. In L. Brunette (ed.) *The critical link 3: interpreters in the community: selected papers from the third International Conference on Interpreting in Legal, Health and Social Service Settings, Montréal, Québec, Canada 22-26 May 2001* (pp. 15-26), Amsterdam: John Benjamins

Marx, C. & Nekula, M. (2014). Verständigung und Sprachmanagement in deutsch-tschechischen Grenzorganisationen. In N. Engel et al., *Grenzen der Grenzüberschreitung. Zur »Übersetzungsleistung« deutsch-tschechischer Grenzorganisationen* (pp. 45-121). Bielefeld: transcript.

Pöchhacker, F. (2004). *Introducing Interpreting Studies*. London: Routledge..

Roy, S. (1993). The problem with definitions, descriptions, and the role metaphors of interpreters. *Journal of Interpretation* 6:1,127-54.

Sherman, T. & Homoláč, J. (2017). “The older I got, it wasn’t a problem for me anymore”: Language brokering as a managed activity and a narrated experience among young Vietnamese immigrants in the Czech Republic, *Multilingua* 36 (1): 1-29.

Weydt, H. (2003). The Inferiority of the Non-native Speaker and its Political Consequences? In P. M. Ryan & R. Terborg (eds.), *Language. Issues of Inequality* (pp. 173-188). México: Universidad Nacional Autónoma de México, Centro de Enseñanza de Lenguas Extranjeras.